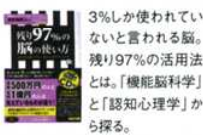


書籍でも、脳に注目!



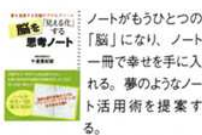
脳を活かす勉強法
— 奇跡の「強化学習」 — 茂木健一郎 / 著
PHP研究所 / 刊
1155円 (税込) 2007年12月発行

「脳の喜びの回路」が一度回れば集中力や記憶力が向上し、雷ダルマ式に成果が上がる。脳科学の第一人者である茂木健一郎氏自らが、少年時代に身につけた勉強法を開陳。脳の特徴を活かせば誰もが能力を開花できるということで、子どもの学力向上を願う親から資格試験を目指す社会人まで幅広く受け入れられ、現在、約75万部のヒットを飛ばしている。



3%しか使われていないと言われる脳。残り97%の活用法とは、「機能脳科学」と「認知心理学」から探る。

残り97%の脳の使い方
吉米地英人 / 著
フォレスト出版 / 刊
1575円 (税込)
2008年11月発行



脳を「見える化」する思考ノート
牛堂登記雄 / 著
ビジネス社 / 刊
1365円 (税込)
2008年9月発行



脳が悦ぶと人は必ず成功する
佐藤富雄 / 著
ナナ・コーポレート・コミュニケーション / 刊
1260円 (税込)
2008年7月発行

すべき研究領域を「豊かな社会の実現に貢献する脳科学(社会脳)」「健やかな人生を支える脳科学(健康脳)」「安全・安心・快適に役立つ脳科学(情報脳)」「基盤技術開発」と定めている。ここで「情報脳」に含まれる産業活用

ここ数年、人間の脳に対する関心や注目が高まり、書籍をはじめとした脳をテーマにした商品から次々、ヒットが生まれている。これまで、その機能や働きについては、説明されていない部分も多かった。研究と技術の進化で、未知の領域が少しずつ解明されつつある中で、その社会的な関心が高まっている。

社会的な脳ブームが 広告界にも波及した?



「脳」ブームを反映してか、脳に関する書籍のコーナーが設置されている (リプロ 青山店)。

用も見据えた指針を出している。11月13日に開かれた「第5回脳科学委員会」では、諮問に対する第1次答申の中間取りまとめ案について審議が行われ、「脳科学研究と社会の調和についてのより踏み込んだ説明が必要」と、的確な答申を作成するための議論が繰り返された。同委員会は今後、科学技術・学術審議会総会での審議やパブリックコメントを経て、09年6月ごろの第1次答申を予定している。

広告活動に新たな視座 企業でも高まる「脳」への関心

社会全体の流れを受け、広告界でも脳研究の活用が進んでいる。広告の評価指標は、目的によっても異なるが、サントリー宣伝部の部長、泉田豊氏の考え方は「記憶に残る広告」という。いくら莫大な費用をかけて広告を出稿しても、最終的には見た人の記憶に残らなければ意味がないということである。

そこで「脳構造や、その働きをもとに人の感情や情報の記憶、理解度を把握できるニューロマーケティングという考え方に、非常に興味を持っていました」と泉田氏は言う。

宣伝部の視点

ニューロマーケティングが目玉の理由① 優れた広告は「覚えてもらえる広告」

右脳と左脳の構造に基づいた、潜在意識に訴えるクリエイティブ手法を取り入れ、意図的にグラフィックの左半分にビジュアル、右半分に文字を配置し、よりインパクトの強い広告効果を狙う。脳神経科学の知見をマーケティング活動に応用する「ニューロマーケティング」に非常に興味がある。

サントリー 宣伝部 部長
泉田 豊氏 Yutaka Senda

脳本、脳トレ...なぜ、いま「脳」が注目なのか?

ここ数年、社会的に「脳」に対する注目が集まっている。「脳トレ」(ミンテンドーDS)など。脳を鍛えること銘打つゲームやドリルなどがヒットになり、WEB上では「脳内メーカー」が人気を集めた。

また、書店では脳関連書籍のコーナーが設置され、今年の4月以降だけを見ても、書名に「脳」がつく新刊書籍の数は100点を超える。

人間の行動をつかさどる場所でありながら、その機能や働きは、なかなか解明されてこなかった「脳」。だからこそ、最近の研究により徐々に明らかになるその機能や可能性に、注目が集まっているようだ。

空前の脳ブームを国や研究者、広告・マーケティング担当者はどう見ているのだろうか。また今後、脳に関する研究はどのような方向に進んでいくのだろうか。

国を挙げて 脳科学分野の研究を支援

脳科学研究の飛躍的な進展に伴い、国もその研究を支援する動きを始め



11月13日に開かれた「第5回脳科学委員会」。第1次答申中間取りまとめ案が発表され、答申の作成に向けて審議が行われた。傍聴席には希望者約30人が集まり、真剣に聞き入っていた。

ている。文部科学省では今年度より、脳科学研究戦略推進プログラムを開始するとともに、文部科学大臣の渡海紀三朗氏(当時)が2007年10月18日、科学技術・学術審議会に対して「長期的展望に立つ脳科学研究の基本的構想及び推進方策」について諮問を行った。

諮問を受けて設置された「脳科学委員会」は現在、答申に向けた審議を行っている。審議では「高齢化、多様化、複雑化が進む現代社会が直面するさまざまな課題の克服に向けて、脳科学に対する社会からの期待が高まっている」との理由から「社会に貢献する脳科学」の実現を目指し、社会への応用を明確に見据えた脳科学研究を戦略的に推進する必要性を提言。これに対応すべく、脳科学研究戦略推進プログラムの運用が図られることとなっている。

また、08年6月に取りまとめられた審議経過報告の中では、重点的に推進